
狂った日常

藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂つた日常

【Zコード】

Z5250A

【作者名】

藍

【あらすじ】

狂つた世界で、くだらない日常を過ごした二人。一人は、自分の居場所を求めて、一人は、自分の幸せを求めて。死に魅入られた二人は・・・

コツ、コツ、コツ。

軽快なリズムを取りながら、私は上へと上った。

午後の授業は、あの嫌味な数学教師だ。
どうせ、義務教育は終わつたんだから、無理に授業に出る必要もな
いだろう。

そう思いながら、階段を上り続けた。

ハア。 ハア。

こんなことで息切れをする自分に嫌気がさす。
顔を上げれば、屋上の入り口が見えた。

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと回した。

ギイイと、耳障りな音を立ててドアが開いた。

開いた瞬間、ぶわっと風が私を襲つた。長い髪がバサバサと波打
つて、私の視界が真っ黒に塗り潰された。冷たい風を肌で感じて止
むのを待つた。少しづつ視界を取り戻しながら、霞んだ世界を見
た。

いつもと変わらない風景の中、違和感を見つけた。

柵の向こう側に、人間がいたのだ。

「なにしてんの？」

なんて呑気に質問しながらその方向へ向かつた。

そいつは隣の席の相澤だった。なにかと縁があつて、2年間同じクラスだった。かといって仲が良かつた訳でもない。単なる他人。と言つてしまえばそれだけのことだ。

「見ててわかんない？」

質問を質問で返された。質問したのは私なんだから答えてくれたつていいじゃない。

「あーー。空飛ぶの？ムリムリ、アンタに翼なんか生えてない。」

本当はこんな答えじゃないってわかつてること、私は微笑つて相澤に言った。

そうでなかつたら良いと願つていたのかも知れない。

「そんな訳ないだろ。どう見ても飛び降りようとしてんだけだ。」

「いやね。もしかしたら飛ぼうとしてるかもつて可能性もあつたからさ。そんな人に自殺するのつていつもかわいそうでしょ。」

呆れた顔で相澤はこつちを見た。

でも、何処か感情が欠落した様な顔だった。何もかも受け入れた顔だった。何もかも諦めた顔だった。これを人間と呼ぶのは相応しいだろうか？

「死ぬの？」

生死なんてさして関係ないかのように問い掛けた。

実際、私達にそんな事どうでもいい。

私たちはもう、死んでいるようなものだから。世界は私たちを受け入れてはくれなかつた。

「さあ？ どうだろう。俺はただ、自分の居場所を探しに行くだけだから。死ぬなんてそんなに考えてない。」

「でも、そんな所にいるんだから死ぬんでしょ。」

「かもね。」

「じゃあ、死ねば？」

まるで日常会話かなにかのように、ただ淡々と言葉を紡いだ。
嗚呼。田の前に広がる現実が分からなくなつたのはいつだつたか。

「一人の人間が死のうとしてるのに、君は止めようとしてないのか？」

「止めたってアンタは聞かないくせに。」

間髪いれずには言つた。

私は無意味なことはしたくない主義だから。アンタが死んだつて私は哀しくなんか無いし、寂しくもない。世界は何も、変わりはしない。

「じゃあ、何を待つてるの？」

「君が来るのを待つてた。」

「へえ。」

よく私が此処へ来ると判つたことに感心しながら

口の端を吊り上げて、さも面白いかのように次の言葉を待つた。

「死ぬ前に、ちょっと色々と聞きたいことがあつたから、聞いておこうと思つて。」

「なあ」「。

「この世界にや、意味なんてあるのかな。」

手前の柵にひじをついて、やる氣があるのか無いのか分からぬ顔で言った。

こいつと話をしていると、

隠し持つた感情がばれそうな気がしてならない。

「何を今更。世界に意味なんてあつたら人間なんて生きていけないよ。」

世界に意味なんてあつたら、出来損ないの私なんて創らないよ。意味が無いから私達は生きていけるんだ。

「じゃあ、生きる意味は必要?」

「さあ。それは人それだとと思つ。

でも、ほとんどの人は生きる意味を持つていないよ。」

「そんなものかな。」

他人事のように、何の感情も感じられない声音だった。

否、他人事なのかもしない。

「俺はさ、生きる意味が分からなくなつた。自分の居場所を捜していふうちに生きる意味を無くしてしまつた。
君は、何のために生きてる?」

「私は生きるために死に、死ぬために生きてる。」

「へえ。君に生きる意味があつたんだ。」

相澤は、少し口を引きつらせて嫌味を言つた。
笑つた顔は無氣味に見えてならない。私も、こんな風に見られてい
るのだろうか。

「別に意味つてわけではないけど、よく居るでしょ 生きる意味は
皆にある。生きる意味を探すために生きてるって言つ人。そんな人
に言い訳するために考えてみた。
私はこの世界では生きていけないから死ぬしかないし、でも、死ぬ
ためには生きないと死ねないから。」

そうでしょう、って皮肉を込めて微笑つて見せた。
このどうしようもなく、くだらない世界で生きていく術を生憎私は
持つていなかつから。
誰も、「えくてはくれなかつたから。

「私もあんたと同じで、幸せを探して意味をなくした。」

「失くしても、何故生きる? 生きていく?

意味が無いと知つて怖くないのか?」

駄々をこねる子供のような双眸で見据えてきた。私はそれを一瞥しただけで、空を見上げた。

何故か、雲ひとつ無い空に無性に嫌気がさした。

「生きる意味が無くなつたって、ヒトは生きていける。意味なんて始めから無かつたのに、今更齧えたつて遅いでしょう。」

意味が欲しいなんて、私が言う権利も資格も無い。
私は只、墮ちていいくだけ。

深い、深い

孤独の淵へ。

「私に意味なんて要らない。私が幸せだと感じることができたら、それだけで生きていける。」

意味なんて求めないから、幸せくじけられたつて良いじゃない。
他は何も望まないからさあ。

ひとつだけでいい
ひとつだけ。

一瞬だけでもいい。幸せだと呼べるものとえてよ。

「でもや、この壊れた世界に幸せなんてあるのかな?
現に、君は幸せを持つていないだろ。」

しつかりとした口調で、確信を持って相澤は言った。

そう。それは紛れも無い真実で、事実で、否定する」ことが出来ない。
それでも私は、

「アンタに私の幸せなんて解らないでしょ。

何が幸せで、何が不幸かなんて、自分自身で決める」となんだから。

「

嘘を吐く事でしか生きて行けないんだから、
これ以上、何も言わないでよ

私は、壊レタク ハ ナイ カ ラ

アンタみたいになりたくない。
アンタみたいに受け入れたくない。

「それでも、君の心は満たされてなんかないよ。満たされてたら、
こんな所に一人でいないだろ?」

どうしてアンタは、私の中に入ってくるの。いつもいつも、ヒトの
心を見透かして、
虫睡が走るわ。

「あはははー！ そうね！ 私は満たされてなんかない。中身なん
て空っぽだから。何にも入ってなんかない。」

声を上げて、笑って見せて、全て投げ出した。

どうせ私は、弱い自分が創り上げたかりそめの虚像でしかない。

「それは違う。」

あつぱりと言葉を告げた。

私の顔から表情が消えた。 一体何が、

「 一体何が、違つてこつのか？」

私の中は空っぽで、心もよみがへりへり不安なの、なんで？

「 デリが違つてこつのか？」

何が、何が？

アンタに何が解るつて言ひの？

「 君は満たされてもないが、空っぽでもない。別のももの埋め死く
されているんだ。」

思考静止。理解不能。

アンタの言つていることがわつぱり解らない。嗚呼、私もどうといつ
完全に壊れてきたかも。

誰でもいいから、この腐敗を止める術を教えてください。

「 じゃあ、一体何が私を埋め死くしてこつの？」

「 君は憎いだらう。この世界が。嫌いで、憎くて、不公平で、理不
公平。どうしようもないだらう。」

そんなの、憎くて当たり前じゃなー。

この不公平を、

「」の理不尽さを、

全て受け入れるつて言いつの？

「まあ、その全てを例え受け入れても、何の変わらない。幸せにもなれない。どっちにしてもそんな感情しか待てなかつたら幸せには為れない。」

幸せ・・・ねえ。

知つてゐるんだらうな、自分はこの世界に自分の幸せがないつてことだ。それでも、それでもソレを求めてゐる自分はもう手遅れ。

「まあ、そうだね。相澤の言う通りかもね。

人間はさあ、最終的には一人なんだよ。孤独からは絶対に逃げることは出来ない。私はそれが怖いんだよ。どうしようもなくね。だから、自分を偽つて他人と仲良しごとに付き合つて、幸せだと思うことしか出来なかつたんだよ。」

幸せをえも偽つて、私は何がしたかつたんだろう。

幸せつてそんなに重たい物だつたのかなあ。

私の幸せはなんだつたのだろう。何が、欲しかつたんだろう。

「幸せが手に入らなかつたのに、君は自分の居場所を持つてゐるのか？」

もうやるやる話が終わるんだな、なんて漠然と考えてみたりして、

探してみた。自分の居場所を。

「在るよ。」

これは私にとっての唯一の真実。
もし、自分の居場所さえも無かつたら、今を生きていくことも出来
なかつたろう。

「在るよ。 居場所。」

「何処に?」

少し眉を寄せて、納得いかない顔で私を見据えた。

「此処だよ。此処。私の場所が、私の世界が自分の居場所。どんな
醜い世界でも、其処でしか私は生きれない。」

「そうか・・・・・。」

それだけ言つて、相澤は何も言わなくなつた。

其れが何だか虚しくなつたけど、それ以外は何も思わなかつた。

もう、私に対する質問は終わったのだろう。

なら、

「私からもさ、質問していい?」

アンタにしか聞くことは無いだろ?質問を。

少し驚いたアンタの顔ほど、面白いものはないだろ？と思ひながら。

「アンタは、幸せだったの？」

こんな単純で難しい質問を、他人はいとも容易く応えていくんだろうな。

其れが眞実でも、偽りでも。

其れがその人の答えなのだから。

「どうだろ？ 幸せだったのかな？ そつだつたかも知れないし、そうでなかつたのかも知れない。どつちにしろ、俺には意味が無い。」

どうせ

どうせ 私達が求めているものが無くなつたつて、生きていくれる。其れに、変わりは無いつて事なのかな。 ホント どうでもいい。

「もしかしたら、もしかしたら

君といった場所が、時間が、幸せだったのかもな。」

はあ。

ホント、最後の最後に凄い事ぶっちゃけるな。 其れでも、死に行くものかよ。

「君いたら、居場所が出来たかも知れないな。」

「そしたら、私の居場所がなくなつただろ？ 他人に邪魔されない世界こそが私の世界なんだから。」

今更、後戻りなんて出来ないんだよ。」

そり、もつ何もかも遅いんだ。戻ることなど、許されない。
永遠など在りはしないんだ。

いずれ人は死ぬ。

只、速いか、遅いかの違いだけ。死から逃げる事は出来ない。

欲望のオマケとして創られた私達は、無理矢理生きることを背負わ
されて、無理矢理死ぬ定めを背負わされて、無責任なこの世界へと、
次々に放り出されるんだ。

確実に、私達は死へと向かっている。

何処かの誰かが言っていた。

自殺することは逃げることなんだよ、と。

私にとっては、自殺も他殺も死ぬことに同じことに変わりは無かつ
た。

でも、

其の人は、この理不尽な世界を、残酷な世の中を、必死で生きていた。もしかしたら、目の前の相澤も必死で生きていたのかもしれないと、私は想つた。

「やあやあ、逝くよ。」

もう私を見ていない相澤は、自分の居場所を見つけに行くんだ。こ
れは逃げにいくんじゃないと、私は想つた。

「私もすぐ、追いつくと思つよ。」

アンタとは違う場所で。

祈つてるよ、居場所が見付かりますように。幸せになりますように。

口には出さないけど。

「一緒に死にたいなんていうなよ。」

「アンタとなんか死にたくないよ。」

なぜか相澤は、こっちを向いた。

「

「

「えつ？」

又しても、私は風に覆われた。其の向こうで人影が姿を消した。

人は呆氣なく死ぬ。消える。忘れられる。

誰かが死んだって、世界は廻り、何も変わらない。いつでも世界は人間をおいて過ぎ去っていく。

人が死んだ。相澤が死んだ。

フェンスの向こうに、血塗れでひしゃげた抜け殻があるんだろう。三歩歩いて立ち止った。私にとつて相澤が死のうが生きようが知ったことではない。興味などない。私が今知ることは、相澤が居なくなつた世界がどうなつたかだ。

どこまでアソツは私の中に根付いているのか。でもどうせ、この感情が揺らぐことはない。何も変わりはないだろう。

後ろを振りかえつて、ドアに手をかけた。

相澤の最後の言葉が、蘇つた。

「うひして最後に、そんな言葉を残すの。私は何もしていない。そんなことを言われる筋合いなんてないじゃない。

ギイイと、耳障りな音を立てて、ドアが開いた。
私は振り返り、フロントを見た。

「うひいたしまして。」

バタン、ドアが閉まった。

この声が粗鄙に胸をさせとよつ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250a/>

狂った日常

2011年1月16日07時07分発行